

題目：動作の同期と自動模倣—じゃんけんを用いた実験的検討—

氏名：仲鉢梨加

指導教員：竹澤正哲

話している相手のしぐさをいつの間にか真似しているというような、非意識的な模倣行動は自動模倣と呼ばれ、これまで広く検討されてきた。じゃんけんという課題を用いてこの自動模倣について検討したものに、Cook et al. (2012)の実験がある。この実験では、ふたりにじゃんけんをする際に両者が目隠しをしている状況よりも、一方が目隠しを外している状況のほうが、あいこの回数が多くなるという結果が得られた。じゃんけんに勝った参加者には追加報酬が与えられていたにも関わらずこのような結果が得られたことは、自動模倣が起きた証拠と言える。また、Yun et al. (2012)の研究では、ペアの相手と指を追いかけ合うという共同作業の前後で、相手に指をさす動作の同期が高まるという知見が得られた。本研究の目的は、Cook et al. (2012)のじゃんけんでの自動模倣の再現と、Yun et al. (2012)で示されたような自動模倣が促進される課題の検討にあった。共同で行う課題は、先行研究で自動模倣を促進したペアで指を追跡し合う課題と、独自に設定した文章の音読課題、それらの統制課題の計 4 種類設定した。実験の結果、自動模倣の証拠は確認されず、共同課題が自動模倣を促進することも無かった。本研究の結果は、自動模倣はどのような状況でも確認されるわけではないというひとつの知見を示したと言える。こうした結果が積み重なることによって、自動模倣の発現の条件や自動模倣がもたらす影響について、今後明らかにしてゆくことができるだろう。